花傳書

多12
1544
3

京都帝国大学図書之印

多12 1544

九ぢくことゝいふは天地陰陽をりくことゝり大ぢくを
小ぢくことゝいふは小數は陰也大數は陽也
ぢく見まあるは六曜れ月をと
ひとをり大ぢくこは月はとへ筒ハはを
りくことは胎蔵界金剛界といふり筒といふは
天竺まては藥王大唐まては馬鳴乃龍樹ふ
極樂あくは業を菩薩といへ是ものをりくを
まあひ水中ア弥のあくこ志城きくぢり
八りのあをあを八葉れ蓮花と親会して
ぢこ志をまなふ太敷といれいりれくな
あつたの宮は住たまふ源大夏乃弥は岩戸れ
時をしめたまふいはもれいてれあまこ

あわとゝへとも大形こゝまようきゝる拍子の
こゝろもちは信おかりなるひ城ゆとして序破
急陰陽のわりちをたゝしく文字白うたけ強の
めりわりを吟して地もしろくたけ高くやー
ゝすかんようなわ拍子はさへあワと思ひ
ちちゝをいめゝゝちちゝとゝ也とゝくけいこ
わゝくゝはしてへなわかゝー岩屋はもの咲
ゝるやうよ清ゝたやゝあゆへくゝ物ゝー
ゝするこゝとゝりをゝりんゝゝゝるい弟一の
あゝきゝゝみゝくゝゝゝろたゝ屋ゝのこゝろもち
こゝゝまき上ゝみあゝゝゝ人ゝ
四月の能は嘶やうれる

一初日のそ二日のまを詠しいろまき花のけ/ゆん
ゝゝやうみたやゝへし
一二日めまは三日めのまは坂のこゝきのふまて
さゝゝさ四ゝ花乃ゝふやゝう屋くゝうふきゝる
やうまたやゝへし
一三日目まは四日めのまをのこゝきのふまて
ゝつさきゝ花のゝふいさゝりとみゆる様は
ゝやすへ
一四日目まは春をおゝこてきゝ物る花乃ゝう
咲みたゝ木ゝこの木すゑ四まの山くも久めき
わゝわ人乃ゝゝろもうきゝゝやうまおゝます
乃こゝゝ城ゝゝ嘶へ四日乃ゝやゝやう

おかるさめ氏りやうへ五日めもあらいを
人乃まり次第に繁をへしめくいへいとて
乃よりるさく法事一番一乃ひらる也又日乃
能とつふすい一切あきすすてる四日の能も
を代さまわん昔い三日ゆわかをあくる
一ふろのなわ把弟なわ的要也弟なわかまん
あけきい見ふくきものすてる弟一乃ひら
あることは弟なわ乃ふすすてる
一絲いろをわきれてあちを志き
一弟なわを志きそひやうを志きもろくく乃
くせ乃あき猿ふ弟一のひら かゝ也
一清おのそやーの事一洲子い双洲なわうゝひ

ほいりうへをさけて猿而うふ大ふいるも
きんふなやをへーをふ志りけへうふ太鼓
貴人のはおをすうーそくてうりへー
あまりふきさそたりくうつへくいつまも
ふく猿云をふくえそわをへ
一太夫かんある仕舞あ猿時大鼓太鼓ふすう
を坂うくぬもの也こまきまき猿くをといひて
わかきふきふ事ー也
一当度の花作ゆれむといふるあわ当度の花と
ドいかめうを志りきこをとてわをおりひて猿の
文字乃くさりやうをもを志ふをとふわのへ
ちくめをもふりけををめくうを打ふたくさんふ

うちうへにあるものをもつぬをはむることを
書座のもとにひて下のたわさなわ作ぬの
をかとといきるへ人まを也あるひ城りんと
をを月ちはたしまうひの文字を元あひ
うちとくはけくするをとおうへ人の歯麻い
地さひきやうはうへともとわまわて字い
をきて地のうーろ一歯麻の花いうーめ面白く
字ゆをともとりはてはまーろあうーうこを
上をトをれわうちも也
一をうぬうひをりやをへうひ人とうひをわ
うるふりをして清りをやーんうあひうるう
おりうひれこうあんをへくも但しうぬ

うひとを屋ーやうあうひいをくの柏子を
ひはりやをへしー口信はあり
一つをれをはきうふうろまちのるをいさわ
やむニいりへをるうちうかけをはさうす
うふときのち
一もんある能むりんけ能といふるありをや
よくに信をへし五文なう能い兄とうろあ
ををるを屋ーまををくたくをやーも文
あ所のふい見而はうあひうを能をかは嘲也
一けううのをれ新横新をかくれいううの
信はあるものなりをはこをけぬ地なり
をといふるい謡のる字くさりのへちくめ城

きゝあらせて所へ
しらしてはあわどちり
思ひうらくとうちえいまゝあふのわん
つぬ抱なわまくくうをひを吟ゝお應ゝさ法
ををうりへゝうゝひ乃呂よわうけをい抱川
よわ所いゝすへゝうゝひのうんうわ所をい
きゝゝまわうちいゝとへし呂かんうゝお應
うんふう也

一度雲のたやゝの事ゝひくゝきあとあきゝとろ
ゝていをもと抜おと思ひ称のすをいわを
たやをへゝひくゝきあ所而ゆくいうきくゝと
たやをへゝ趣別ひくゝきのさゝきひくゝね
ゆゝきゝとのおちうひせけいうみをきうれ

さゝきのくふうをふ別してうゝあゝうんい
よくゝひくゝきあきゝとろうてをかねしゝ所
まゝきなわ

二 志ゝうなるすたやきすんあわたやきす
まはををたやくゝうろを志川むろゝなる
事ゝまはをを志ゝけあんをいさむ加横乃ん抱
をも太和かわまは女ゝうせ男てうせの位と
つゝわ陰陽乃す也ゝろもちゝとをを二つま
わくは低なわ

一 出ゝ乃位まくゝ志おゝわの位とつふるあわ
あゝひまゝ志さきのうゝひをむをうゝふくゝ
心乃うちま吟ゝてをゝをかんうんうち

おとへ　まんの部の次第いつきも大小太鼓
打おろすひとうちめんもちいつきい
わきろうひくくねるようむくせのひろ位の
すえの位鼓ひきさきのおくろくねみうち
ひきむるうれ位鼓うけきろ大変ろおくろ
位鼓ひうつゆへみくろかみわれ位といわ
一　絲のおろくとろ能すていい変ろ分かまん
おりもを見合せておろを度変すていい笛ま
きうふへしうちに序のうちまけを大る
なわれろ一番笛と大小ともにおろを也絲の
るかんきんあきいうくしけへし
一　鼓ひきうふ事才一くせをきまんするを

ようくだ　るむへしいるもくかけくと
うちうんに可能ろまんをろあ一せいのう
ようふいあるまくくん
一　眼い腰ひあき物いうさきむひきをまん
事才一秘る也
おりひわきれておうへひ心おのるまんの
巻うををうくいてはひするをうろけ
へしまんのんをうくいておりひしてを屋くへい
はれをるうさうあくすあくきものなわ是鼓
きうふをやきをきねゆといわ上ひ下ひれ
わうち也おのくろきんおなわ
一　流藝ひ　あくれ事ひまろくありぬろをまて

さへうしん戦いまうまきこゆるものせかく
難敵をへ

一扨ものとうとは陰陽也阿吽の二字なり是を
たとへたりたけきさまを元あらせ陰陽和合と
是をいつたる和かわるけはめそうせれそうせと
いつ陰の能あるいとて陰とそうわんにてそうや
うへ能なりかへ一陰は陽の心をまへへ
まを陰を打心は陽成ふくむ又陽の能あるい
とて陽のんもちうわをそやへいたくを
作ふをていやしくふまは陽のこころをまち
ひまは陰成ふくむこまをひしをそうせの
中乃男たうせれたうせれ中のめそうせと云

んはと同おうりる
一ものとは拍子とは次第の事也上略中略下略
かれうをおかとそもとは拍子といつまは
うちうへをまわもとは拍子とあつをうわ
かの次第はすは巻は是をあうん地いたき
いくを心うちいをしこころは伝
一舞い一拍のみをまなかは伝をを
一うこいさうたのこたまなわ
一うんひやういたきうこのうたたまはわたうぬ
たやうもいつわ
一いろのをうとはるあわ赤是こまいくや
こいあさきも鄙せむうさきうとあさきは白い

ちうせいなども云ふなわしこころもち
さぶ太郎いのゝ乃くるゝるちうひとやーたなわ
ゝ〜むーゝゝわゝ伝る
一いろゝの葉といふすあわ是ゝい源氏供養遊屋
関ちるすもたゝし関ちい老女の葉をまい
ふるあるへ
一ゝゝ見そ中指子ゝ成ゝすもてゝろ所の嘲城仕お
ちん指子とゝい数四ゝ也一指子とゝそるよ
あわ志〜へ乃指子とゝ
一筆乃なすわ指ゝ礼度姿ゝ
へしせちきとゝろゝ
おかきようていゝ

そ時いゝきよ似合んやうよいゝおもちん
志やゝよいろゝき花乃ゝおゝそゝろゝくゝみ
ちやゝ也へ〜しまゝひろきさ〜きすてゝゝて
おかきよいやすへしきさ〜き相應む乃ゝ
湖子もひき〜湖子い大度姿ゝていあゝくゝ
そ度姿乃わ應うんゝゝゝみ也
一
むゝ〜い葉乃ゝちゝゝまわちくゝを折さへゝゝ
きちも図およゝけるを代いゝまあ〜き伐也
とて折さへゝゝちゝくゝ世を伐よ折さへ
ゝへいゝけもあき指ゝなるすわ越前上ゝ乃
ちやゝよ方指のゝるいゝきすのゝゝゝ下ゝ乃
ちやゝよかあゝゝあ指よゝあひゝちます

けまわすきさまもとあはいまして仕さ屋
いろわなしいさやうみのゝぬ嶽いそやくうち
あけはる習ひ也能さゝ者まゝ拍子へ
一藝いんまわいゝるゝとたゝろゝやゝう
なる人のするわさい藝もかきてやゝう也
心乃ゝなる人のすゝる事さい必けいもきた
さゝまゝわてけいあうわゝへゝうれゝろゝも
おをる拍也もるわさ下まあまいうあゝすき
人乃心あゝき事なたり我心をゆるさゝふ
ゝあわてけいさゝふ拍なわおわかえゝて
人も能氣おとゝかめゝへいゝ身ゝ之まんし
稽古ふさゝなわとゝゝみやうもんを折まて

稽古法おゝとゝへゝとゝくゝまろけくふうゝ別
まわいゝる拍なわ他けいこなくていゝ別そ
ゝゝひゝ事也けいこまわいてゝる思素也
上まとあひまなわまゝあひそやゝへい
まる之わさあうるものまて下まとおあひ
なやゝへいさうる拍まてゝ時のんもち
只わゝすわさをろくゝまへしおをれ下ま
あまいとて之いゝ之をむさと之うけおとゝ
小ゝ才一のひゝゝとなわ法藝あゝひまい
まて拍子まあゝと思ひ力ゝまくまあくの
と法まを拍子きゝとゝ卜也ゝれい上ま
とはいゝれさゝ也習ひおとゝて之乃位を

わさまへくりまくるときやうは中のしろく
たゝみを上まとはいへわめくいつへきいまさ
いてさらさらなる上まをまきうへいきいよたく
ちいさくなりてあらうねはなすわ初心のときい
つよもはよくあーうひろことく嘲へしされハ
上ををいまきてま稱へうしとはめくれこく
くのいまちまはても大夫も上中の拍子を
ふこなうひをかとして面白き仕舞をする城
上まとゝ云むまーきところめくひやうしを
ふこふむへき所ふくく拍子を崇しむさとすち
あき事をこたむ大夫を拍子きくとハ也
是ハ高ろあしハ

一笛乃いろ〳〵のすつ〳〵れあきところあとろ
ふくたまの仕舞あ〳〵そりあ〳〵をいろ〳〵へし
たゝへい宮あなとふくふいこころさんロろ
あ〳〵りの墓所ふまいのりの供ドろいんにに
ドんこふさへは入うんとうひて二是三あ
拍もいたてつるうやうの所をはしんりて
いろ〳〵りもの也同ーく狂云乃いに肝要なり
加様乃ろ遊屋すーきく字治物改ちとるも
ありをかいつまの絲るもおかき事なわ笛
ぬうハまーきなわ笛あくうへい大まてるは
あき拍なりあ〳〵かんよう也
一女ろ也男ろ也女中の男ろ也男いろ也乃

中の女とうせとつふまるあり歯あるは陰陽と
こまをいふまて分別あるへし陰の強い女也
かるゆへよくとたをやうふ嘲さへし
但あまり陰まんうけうへいたやーよたくる
こころ陽をふくむへーまたく陰はこころへ
くへいさあうらをとこころ陰陽和合するり
まわてたやーまよ一同一陽の能是をもつて
分別をへ

一越きさこのるすはる字いめはめ字いたく
一小鼓こけきまる字いきさこめはめ字扱り
一女は幽冥陰の中は陽なわ
一男はゆふきいいうい陰氣い陽也

況壹の男陽のたやーなわ
一草木の情たやーみ事ー大略い陰なわ但陽も
まこまーあわうふひまはまわ不はまわて陽城
まるもあわ
一序の深いうけて主張ところむる
一破乃強いまいうきてこころをこつむる
陰の中乃陽遊屋千妻の強なわあーりよく
分別あるへ
一鬼乃たやーのすきたうさいたうとて二流
あわ里きたう乃鬼いちりうをたうくさい
たう乃鬼いうせいたうわをたうく毛を里き
たうさいたうとおつけうわ鬼乃女の鬼と云

事もおもかるべしもちろんこれまたて分別あるべし
鬼はめいとの鬼現在の鬼乃ち屋こころ内もち
ちろんへしやまうとんきいたう異象
あるひろうへいまきたうも屋こころ地もて
いたるべし又五臣の鬼とて人おとの面会もて
鬼よなるものあるやうまいくいろも鬼の
わうちあるわ方鬼離れこころもちうまくふ
ちろん屋こころけいこまへし

一小作を送るいたうきりいしきなわうこと
ふきあるひもていはちまとも上るの作こうの
かけんいやく天下一まてんてんかれかきんい
ちくこふきういしきも

一高曲まはちへのひやうしに地之理
一作きふくこうひ清所望あるい大小ろ
まはこうひ乃機を三いろりのうておく
べしあるひも

一まのたやの乃事大る也いつまも陰なり
きふまもて離うまへまるものみくいは何も
陰のたやあまい陽のこころをもて移ふり
をもさまんやうまは離をへ

一鬼乃夷の る弾木かるひこまち舩橋三麦う
よくまてんもかうやうのたくひ是まて分別
あるべし

一鉄をいうくきん鉄れたややうあるひあれ

四方をしてむさとたゝ屋ゝへに奚いきかひ
ぬけたる更是をきゝふいるも奚れいきくと
みしん揺ゆりやをへ〔
一早苗乃ん山もちやき鯖まはよろ作のてう
りたうわいと〻鯖のやきよ酒さもりわ
つゝもき城うけてうちゝへいそいてゝそ
ゝをかうんらしゝゝよくのわゝへさゝうゐ
ちふ事あわ酒子をふくませうひも酒子ゐ
かゝく大小もこゝろよ陰をもちゝ玉陽をうち
ゝへいをの色とすきかきんみちやくなわや
位よゆく拙也
一ゆくゝまこゝ為うちといふことあわは侍

一ときわうちといふるあわは侍
一太乃ゝやーいこまやゝふ笛も鼓もまをうり
一たれゝゝやゝそうんゝきゝやすなわ
一中の序といふいはロよきハまわ平酒ゐーと
いふい序なわゝくまたきといふるあわ侍
を代三番よさゝむ
一山姿乃うけゐ盤涛なるへゝ志ゝかきわ也
一猩くれみゝ色大事也みゝれ是を見あもせ
見たまきのふゐゝひ物あり〻やーの下巻り
こまをあゝりん
一一日のうちよ乃戒るあゝいゝますへあきこ侍ゝ
うへゝゝん笛いきんの祢とりをふくへゝん

一ちちのかの出く笛をしひあわせ
一度二人三人して稽事あわせを大まり
かねいひきうちみと上をめうけりんとして
いやまへし
一ちや笛みさうわちゑ笛二人して吹事あわ
是さいくいるきる也あいまうやうのことも
めつ〳〵くあわてよす
一きわの強いきうへし弓もちを見へ習ひの
ふようをてふようをするあきい拍乃出ところ
かんようなわ氣をきめてこをうくふる
才一乃ふしひ也
一才一きゝふ事ますんをを也

一弱んきありうをふちうらのまの中乃
ふしあわせ仕をへ
一きけるとあのうきるころ也
一くあいのうらニつあうう同あち也
一とあうらい二つめを仕むへし
一拍子乃あと後うつといふい強をやわうちふ
ふるまて也
一一ちやうけゝの強やう大なわいうふも
こまやうふうくく文字はあと後うへし
ひとわうゝひなういうゝひうろくあふへし
文字くさわきゝあちせ打へうひてあまこ
まてつゝあいてきは時い何ともきれうく

一ちやうぢすてひとわらひたやをする
くるおかりさみゆくいをわらくあひをあは
時乃ぢくうのくさわるひきうへ温の力を
少ひけさひくあき横ゑ地ぢもわを面白く
いろゑるうんようも
一あとへゆくきさこの事うくぶ地よい沢へ切
一おへりきさこの事一のぶ機のす但うこひよ
ようて志うくぢまつうきくぢくろひて
うぢ面
一法藝者ゑよむよゆ乃あくうひ坂うつて
第一の秘事也
一うち曲薬ゑをうきくとうとふへたやき
をうきい面うてるへしんいうをもは心也
一きさこ乃ゑ志ういすきあわうはおハぶく
一二よまはうらぢきいうを十を四三い
大略ぢきいくをろこをきい金春わくわなわ面流い
大略ぢきいくをろこをきい金春わくわなわ
一次第乃地をとふくろゑつくをすぢうまへ
よをうけしゑをうけぬ地なわ
一陰は嚇のるううらきさたちおおをん也
一陽のくやの乃事ううらきさくともをぢき
いくをん也たし曲薬一いの中よ二いろよ
わくぶんはあわ右よりよぢる陽の中は陰乃
事なわ

一天子の衣乃れろもあるは三位あり三指みえて
指乃きへし
一衣のうやーは序破急あり衣とむる時儀乃
とむきい指子志とろなすわそわかへそまり
指子をうせて作あてとむきいきかうきも
一衣乃うち笛の山さとあいうひうつわふうく
ひーきうけてうーうきいきもいきやく
なる指なすわうれうへ笛とうーひとのうけわ
うくくなるものなわ
一被の衣きわれうちはまひうんとをいかわも
きまー破急あくとむるるみあえきて笛るも
一女まひのるふのちんのる才一乃ゆーひも

一作わ指あわ次才一おの事作り指みきいへ
いてさふるいうーういをうーを一おうい
うー城とさんうまこ口作指作
一大角ーえ小へーうのうやーのいもちれる
大へーみいゆるくとゆたうふちやきへ
小へーえいうふやうふちやくりやをへし
是ちやき鬼なわ
一あくせういのわてしちやきへし
一作ーうは被ものはいふるあわ人とに一おうを
わうくやーと作さうくん是いひう事なわ大ま
といてんうといいるあのうろ作ーくんい
さふわう指みていあるまーくんわうあのと

たやすくい居曲筆のする也大変仕業もなく
うつひまてすてる居けしこの曲よりわかりい
ゐ居曲筆をわり拍とときこめうわ
一笛乃伝洞子乃ふきいうこいうこひそのあき
いうきちちる洞子るをよしといへわ松な
ふこむけたきをうへくるやうはけたりあこ
かんようは松いさすう木をひて面白く
けすけたきれむいさきうつくけす
いきけうひの心もちをいくくくのむり乃
ちこふはたへうわ弟一うまくるき横こ
吹ゑうりけるわ
一一せいはひしく一せいひりぬ、せいうこ

ひきまろひしきといふるあわ仕掛かた
さうわたこきらいうくひきなりひしきの
くるは城あてを能乃序破急成るへし
一うこひろうちはいろろ乃る居かんのいはを
分別をし
一ちうたやいい三毒はあわ
一たやき一せいいあうわ
一中は一せいい角田川
一ちけうなる一部いまうせ
一ちんの一部いい宝家
一かろき次弟い綿木の大夫出ん次弟なわ
一備後の一せいはありあまりき事也

一脇指のかき作をハくらゝわ新おしへし
一屋こゝのくゝゐ屋あつといつのあいたてをうち
作くゝあつとゝあいたてを引入りゝいゝあつて
むゝよわつゝ作屋こゝそとうゝわおゝいまゝ
なわいきこゝ見くんゝもいきこゝまゝわ屋
こゝゝたゝわおゝ拍也いきこゝ作要也今い
屋こゝあまわて一たゝきいゝまきとて
きゝこゝやこゝゝもひきくかくゝゝ也但ゝこひ乃
調子とこゝゝふゝゝへし一せい次第おとゝや
変ゝいきとせねいゝこひゝきものゝ
たゝわゝくゝゝゝ大まゝゝこひゝ屋こゝゝもも
ひきく高ゝもひゝゝゆる也

たもてゝゝゝわゝゝゝゝ一といつゝあわゝゝ細ゝ
大まゝ上ゝゝゝきいゝ不通ゝめつゝゝきゝもてを
かくゝゝゝあわゝゝゝ時いゝ羽ひを引ゝゝゝもてを
ゝゝまゝしこゝゝ上ゝまゝ乃わゝさゝわ
一むゝゝいゝゝ作くゝみゝゝこゝゝけくゝわゝゝる
ゝてゝゝこゝ一但当世いかゝ一大まとゝわ
ゝまいこゝゝをこゝゝまゝすゝゝいむゝゝゝ
作き作当世ゝゝゝゝゝをもくゝゝつゝゝのこゝ
ゝけし老ゝる時流事撰ゝゝゝゝゝゆへゝ
こゝゝの相應ゝまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
時の嘲いとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ当世いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

世るもかろ〜こゝわりんもろ〜あたりひも
やすーそれよりさうひ鄰もかろしめはしめ
とも上をあわてきつうふんち成見ちとをは
ちくへきを尚世も上よりよりいりる事
をいい初いすーてふきんをかくへ〜ん金春
せんちく就世書阿弥金剛そうせりから高や
連阿弥めはさ〜めをくらんへいわろしーとも
花伝書の抑もてよろむくへ〜ん技藝さんの
とーよりわてゆるきそりあり年よりぬきい
よろちのけいおもーふ別よいたく年よりわ
〜ろところうけ藝をうろくをわうきときい
藝をもくもへ〜めくはしとくんに肝要也

一貴人のちおよて笛清所所望あ〜い呂よりわふき
い〜弥とりをふくへ〜中人乃まんへよてい
さうは弥とりをふくへ〜但きを色たてく
清所所望あ〜い中乃る者よりの吹へ〜しトめなる
人乃まんへよてそりよもさうは吹へ〜つよの
清所所望はうあ〜きされを吹なり
一小清〜〜りみくち所所望あ〜いおきち見を
うりなり
一大清くみくうりよて清所所望なる〜い次第を
うりなり
一太鼓〜〜りみく清所所望あ〜いきさこよりあ
出〜〜ちあをもも也〜〜きいうこひるきときの

一女法師の時乃ふるまい

一ふるひい小袖ふれけいきにてきよ仏会ふる
祝云ふふなわつまのころけなくして
餓よ法師の時いい仏会ふることこうこうられ
さふものまてゝ書ふ書ふ書ふ書ふ
書人の法師乃時いさふをいつまへて
一薬い祝云のきわをまふへてさーき薬いよ祝
ふくふく拍子ふまるふ
一大作ふふうたいふ人法師ふ
うち出ふうちあふ也
一児若衆乃まんみていふもむやふうつへ
一女房衆の法おまていふもけたふ

一知識長老乃能化ふまんみていふもかきて
弟子ふ折へて
一ふふひのきわ乃ふ拍子ふ乃信祝ふみていふ
ふもふをすくふくおへてきわふはあまわふ
ふいふきものなわ
一大つふふ二拍ふへてといふ事ふわおまと
歯麻ふあわ
一ふふひの大作ふ大事乃ふふーあわふひ
あふすに信
一ひやうてうふ北笛三番ふわふふふねなわ
むふふ江口ふ吹ふふ近代めふ
一時ふふわひきふ礼拍子ふるふあわ

一かうゑの葉乃ゆ乱掐子れの所拍なりロ徳
一あらす事女の葉ゆ一ロ拍拍の一白ゆ一ロ
ゆりなゆ一ロ三とゑろゆはゑり
一尚代の作くみい我位をちゆてあゆ也ねゆ我
ゑちむくうゑりたゆてゑ川二三嘉まてい
まきれぬゆとも作めていゆとゑけゆ也いせ
ゆりあゆせゑりかはけゆあゆうゆまゆあゆまゆ
ゑゆいきくゆふゑりはけいこ我肝要ゆ也へし
一くれたの大作くみゆのみ三ロゆゆゑとゆふ事
ありロ徳
一葉い五徳ゆゑゑむ作ゆきゆてい可徳ゆ昔い
三徳ゆ是をさゑゑむ尚代ゆあまりゑゆうきゆとて

五徳ゆゑゑ我さゑゑめゆ七ゆ七とてゆせ川乃
葉なりゆ是を九ロゆゆ日けて九十のゆやゆとも
ゆへゆ九ロゆとゆへい序ゆ序破急ゆり破ゆり
序破急ゆり急ゆ序破急ゆり破急ゆりめ代ゆあゆい九ロ
なりゆゑゑゆゑゑゆして折へしゑくきのふい
うすきロゆのもゑちゆと宝ゆのゑちゆきひ
作ふしゑくゑゑを九ゆ九ゆ乃浄土ゆゑくゑゑとゆて
菩薩の葉ゆそひなゆゑゆふゆ節ゆて五徳也
ゑけゑ川いきゑゑくゑ也極楽代ゑくの字也
一ゆいゆゆりむゑゑ川きゑゆをゑちゑけいゆ
ロ作をゑ川へし頃ゆゑけゆきいひたゑ也
一ゆをゑ乃ゑゆもち見拍代とをゆきをゑゑんとゆふゆ

ちりきをきんとゝつとをきとちめきやうみ
たやもへしちりきをとをきやうは嘲もへし
こきあゝひも

一かく屋ゝかりき大変みくもてめ弱亦すても
いつはをきるゝ一かりを見ゝていき
ゝくあ見拍流いろめくうかぬゝてこきを
忘きさわゝあゝゝ衣裳おもてをゝまいゝゝね
をきわゝゝ一変ゝと見へきも

一ふゝとむる一せいふゝとめぬ一せいといふ
ゝとあわ拍りゝろや月満上ようゝんてあゝ
とゝふいふゝとむるたるわか横のたくひおや
うんゝへし見をゝつてゝかこ別すへ

箔小行ゝを大ゝく見大鼓ゝゝひいこきすても
を肉の上まを同ゝけて位をきき

一拍子の役者わきあゝとあくきゝくあめの人なゝい
わゝ位ゝまゝゝも拍子をひきゝゝへ

一わきゝわきゝめの役者あわゝとゝふゝともゝち
ゝきむやゝゝゝは三益也笛大鼓ゝきも同お

一あ座のゝいい乃能の事ゝゝきふまとおゝゝ
ゝ八幡とゝ箔きゝひけとねきめ乃家綿まと
まつむ

一祝云乃ゝゝひ乃屋ゝゝいきよかんゝけへし

一拍きゝ乃中舞ゝもあゝゝ一せいゝも次ゝゝも
あゝひゝゝくくとのゝてゝゝも也むきふまを

うさをしへのうしとつの事あわ口伝
是よも生華あわ能ようわんゆちいろく
かたらへ

一天氣よきぬ時ゆ爲なると胴子うわめよなわ嘲も
めたらへくなわたうわ又天氣あしきときい
胴よもめ法人乃こうろも志めりあうわうき
うつこうろ可ぬこうきこれやうよちわ
生へし天氣よりあしきの心持なわ

一ぬくこうちきうあひうさよ仕舞あいつこの
うれいに成ゆをへしつこ乃うちきわ乃ゆる
方更をこと行やきこの也ゆあよとをとわ
ゆきき大夫をうくうろ書あいつこまを

うちうへ生へしあううきこうきい仕舞可
よわみあうへし同く二三人いれるゆを
ゆをとあいのうこひの時うちまい るとうろ
うれうちよあおとをわまきれをうくうち
まをうつまあいをうきをかんよ侍あちせ
うちきふへしあいのうこひあとい侍くこよわ
打うけんうちよたちおうふうれ時みあちせ
うちきわてうひつこさするなわこきもみ
生ゆこひをうくたちまつこいまさ打へ生
爲こうやうの見あんせかんうなわ
一七孫義盛久元服曽我うちくいれきも同お
こきいつまこへもわうへし

一なをかの西の橋次第に所ところ所に新しい何も図意也

一大頭大つゝに小つゝまゝ分のようこゝろのようと

いの事あり多数うちあちあるところ乃

ようあり古のようなくくゝ志かまのゝぬ抱

なわ又おまわようすきくへいくをとみしん

抱也くゝ乃んくけくけりんようも也ようの乃なき

つゝい佛門ゝとゝてきくゝふすも也きうへきわ

ようきもの也ようきくゝこれいきかくくるうきん

加横乃いくけ肝要なわ

一きんなの祝云いあらんひ乃抱狙うきゝ多班女

も乃くゝなわ是いけまへもわくゝはへまく

ものゝ多ひまるとて百姓三牲ものなろ

ゝにいかゝあくゝひ是いかゝちをあまわきんい

ひねゝ習ひまて也但又右の肉ゝ花くくゝ見い

くくゝもちりわりんなわ

一衰傷の中乃衰傷とゝい角西川ゝ西郡昭君の

きん へ松乃山加くゝうのまへこゝきゝれたくひの

能すも分別をへし

一衰傷此中の祝云の能所乃ゆきいゝゝ熊野宗

あかうめ川なわ此新乃能を多ていひへ

一きんは机曲とゝい赤國下西國下源政流海西

なわ此おは此新のくくひ是をもつていい得へし

一迦去乃能をゝか西の橋遊屋こゝ城い迦去乃

れくひ乃能んはへし

一さうの乱曲老松乃曲謡本屋居士の曲謡なり
是をいろはたくひ乃縁分なへし
一きやうらん曲志ゝひけ乃曲さゝきろへ
出帝の子あけびたくひ也是をいはくゝゐの
のふ分別わかへし
一祝云の謡わ生霊波の梅也是城もつて祝云の
のふびあ分別ろへし
志うきん乃才一とゝいあをいゝあと祝云を
ふくさきかふてかくへゝつよもさかやうふ
たくさんようりへゝさちうゝ扨のゝろうゝ
せんすゆわとうり面ゝ
一迦云い扨はたへい花山と出く家物をわさを

廣来弥京よ玉て日城くゝさとゝいつふも
ゆくゝはくかやくふたやさへし祝云よおくわ
ふハきゃふてすの清よもさとゝろ波やゝけ
扨のゝろき曲をあくへゝさき迦云乃中意也
ぶくいはへし
一きんかのくやゝ乃すゝいおれ迦云のふくく
なわくろ也たへいゆうきんい春のあけかのふ
仰くわ也意慕い秋乃ゆふへをのそむくこと
月の秋乃くまもあきろゝ美中よむゝのくゝ
くゝふ扨そくきゝえ源宮よまわ入月新
まてもゝとそくきやうなる心扨なわゝくよも
くゝ云ふくくしはくけそれもゝろくゝ扨の

相應よしやすへ〜をなと拡こ海やうふう
くきををうりへ〜うこひよ地もろき曲い
ぴきんかよまへしまくんなて嘲へし
一哀傷乃ぐやーの事たとへい玄の花乃秋の
名葉こかちりくよなわくて飛山乃うせ
地をこきころ也ゆくもうき一をかんろ
むよあてりやをへし屋こ玄の位こひ乃
きんよ和應して哀傷よりけへしをあとをも
町うたくさんよけすきよみ花やゆるまい
こぬ位い陰のくろね也よくんは屋
一乱曲ぴ曲いハ大るのさ屋一也いつまとりと
ゆうとりまき濫を流通すへしてよの濫よ

ハ音都ノ吟文字うつわり白浜きとくを替ま
のへちくめのすむつりしくよくころもちて
うりへし乱曲よりわてかんちゆきるてね而
物ものこくんかくへしあとさき拡ひつとり
中をひとつ地をくる地中をひつとわてあと
ときを一ツ地くねるすてやりひろゆる而弱
るてやるところこひ乃ふりよりあくれ
ゆきやうきへし口位をあとをもいをもうを
本よ花のさきころやうなるをを打へ
右五言の嘲次第おかうこめぴこま
なる俳ハ口位ちくてい兼よ及ひろ
一つ〜のよれ事我ちこもをを打ちかり

のりうる故おもひくわつて志ていうくかくへて
ちとさまてしてう
一紙すき時乃うくやーの事ハ行きたうわるまい
狂一志ゆまきはくとうろをくうあひくたまま
かゐしして大るなわらくてるむへし
くやーうわなわたいはきをひちをくまい紙の
うろもちむまよりへーたはは心うけうかい
嘲よまう称あわてまうわあるものなわ
一小てうまはすは地川のうーのうんれうを
うしうまてあうは地ーめ越うは中の地乃
ものませてはを越うわはと沼おいうは地中
乃うまを紙てはは三はうちれはうーうてて
乃まてこを頭うう考てうするきさこうて
三をうは抑つあめはは中をは乃数いわかくあく
うへは上略中略下略してをまををうとうん
うひ乃向うはわは似合うう而あてうふへし
のへちくめをいうけ抑のーうくつるうちう
うををとうふまうをなわともをかうり
のーまいはへうひつーかめーまうきてわ城
ううは男ひうういへいをはしちたき事
かきわあーうまを当度の花とうんわあーき
るなわ
一門おうくやーー大小笛太鼓ううひともみうら
まーあきりへーー濃かうまーやうるあーひなわ

やうてうへ伝とて伝なわ

一むことのうめとのかへ方をすれへ大小太
鼓笛等の事是をきゝふいもちせむまふをを
うりへ

一舩中まての心持太鼓大小笛等のあるをを
打へうへかへまををもうことを大鼓をためし
うう義をへし笛吹ものむる成吹へ

一わうまの笛い調子双調ひの拍子をいめい
太鼓いあうすを城うりへし口伝あひわり
小つゝ拍子のをを打へし笛ひくへうす

一おきけゝ乃る名祭ふる人乃位よりうつへし
雅こんへし石家殿上人平家の一門源氏の

一門あとい町うう三位四位もあるへ
又市代家の清盛乃なとい二位すゝやき
舟人きこわかとい一位ふるへ

一一せいの笛ま四日一度吹をあわ口伝
まんの一せいまあわ口伝

一口口のまを乃あひしゝひといふまあわ口伝

一吹ゑてといふ事笛まあり是いたきゝ乃伝
まつわの時をあひの能おりもふさうへふ
例るなわ口伝

一笛舞のうちのを初いなる方更の舞れとき
うんをうちやうて吹へし上を乃方更をうい
大まを乃わを兄合をれ吹不わ伝へし

八拍子

○
●　○　●　●　●　○
○——○——○
うろきこのあひだ
ささうろ也
中拍子
えをかーたち
はく拍子
うろき拍子
ぐつめ拍子
はきか拍子
ともに

次才三まかうわちさは
きいまつさきうつ
才一のいちさは　ぬんち
たちはうぬなり才二
たまーぬのあきう如く
五味也才三いうろ　為
付いきうる拍乃こと
をたうーく拍子也才三の
拍子いうろき拍子も中の
拍子も為付拍子もこも
をんる三拍子うろひん
上ほれひやうーなり

一のふ乃位乃事いうまきうの絃なりとも変
とうーりわをーいうやーれうろもちなるへし
いうまをーひさちなわとてもをーひのとく
まはいやきぬ拍也いろまきの事もかうひい
むまるまあて当座のきてんかんう也
一貴人乃はうーひをとちやをるあわを時い
き人のうーひ下をなわともろれまはくへ
又拍子うーなとあき人なわともこをさうり
初ふと見うけをーとやーうまはをやーうけぬ
拍也き人の拍濁れをやーやうなわ又一座の
大夫もをちを也座うわあてうふーとるーー拍別
きうーをやうーひをもうーひん人まつーきうり

をへんやうはおるはかれかつけ也
一ひくをかくゆるすい上まの名をとりうへい
かくへてもうつへし是いりへわうて初んを
わまをまぬなわ却りろ〻めくへもせんを或
うくをたうくかきて却るすぬうくきもの也
一笹戸是いあくを出所をんにて嘲まへしは侍
一大后のかのりいうと似うわ
一山伏乃名聚いを伝ふまいんにてさう乃あの至
ふとけかーうーう一ツ
一ツ是の能も大夫の舞やないかろくさくくと
くやまへし地うふへしにきりたくこと
ちうわのをやしやうはの嘲うさちね拍なわ

あうひふ大夫きわくくと舞るあうくひ乃内
うくひするまは却きわをとせぬもの也大夫
きうふまふあいつ二ツ却きわんあうひ
一ツ又一ツ却きわんあ習ひうちきうす一拍
子まてやりうてもよんかけ乃うけ地うを
くやーてかんようせみいくくく大夫きうり
けあて舞うて舞とありうまもたけむる能あわ
あふ乃うへ乃うちけせかくれゆうふよくく
うやう乃あうくひうつまう祢い大夫の中入
あうん地うくひの肝要あ也同くく八橋のいう
あくく松風ゆわ乃をとさうひくくそなわまくる
か横ん所おかくく大夫きわくくとくたうき儀

志つむる仕業あわせ能よかきそうやう乃
たくひ和歌是をもつて分別をへし何時も
大夫は国をたゝかさんいうけゝ大夫の分乃
あわよを拙なてはたゝ地くさひの見合せ
うんようもたとひつまよは志めぬ而なわとも
志夫の仕業儀は志川めい難くひおかきは
行すく志川めゝ拙い揚のこゝろけ約要也
一唐船くしめいきをあくい祝云きをも祝云
一女乃我の子破のゝ座なわ
一天敷こまい破乃序なわ
一さか山祝云ゝ乃破のゝ座也
一酒を女況云なわ破の能なわ
一乃ゆゝ志とやうふゝやゝをへしきわい破なわ
序い志乃ゝゝ也
一岩舟西作序の能なわ
一小つゝ大作ゝりわくる皮なてうり時れい拙
くるゝくる皮なて打時乃心もちの事まつ
いわくる皮ないい小つゝいきさゝちまうり
へし拙横のくいうゝまとつわくる皮なくい
必さきくるもの也の作事みる賀んきいに
うんようも志ゝさゝくるゝ拙なわくやうのこゝろ
けまへうとゝわ分別くてあきゝ乃をみて
儀は人の情西申あわせきをいにゝをへ
一ふゝとむる一せい真の一部さう乃一部

行の一せいのほ一せいの〳〵ぬ一せい中の一せい
きうりなる一せいく〳〵一せいの物ゆいく
いろも一ぎの数あれいつまもおものよりわ
見のいつほ赤の侍いて佛のはいてあるひい
天人ゑ京上藷中の女いやしき女抱狂木ゆ
すゝやき舩頭さうひゑ家うまくの一せい
ん拍よりてちうふへしいたへよくく
に侍けいこうてこ侍やうふえやわくへし
祝云の一ぎまんなれ一ぎゆうきれの一せい
あいちやうの一せい礼曲太のころつけうて
うれくまこころをさやしらへしなこ乃言
ぎまりてうまこ〳〵まらう

一忘れ物もみた　一けふ　太　一揚屋妓尤
一あやのつゝ右　一ひらやま右　一明衣　尤
一誓約する　尤　一二人勢　右　一吉原勢尤
まうまゝき事をう〳〵ひまこうゝ皮
すていなれ拍うあ〳〵まこゝほき拍也ゆい
きへし又ゝきはれ皮も文と文とうてうまる
拍也おあく雨の日天氣すきとゝきくわあわ
うやうの事ゝくいうけの要なわ文ふうき
皮ぎと拔いこうりてた作ふとてをき
いほく時俄まとわいゝこうけなまとれい
ゝき言い出ぬ拍也とくゝまき言い川ほ時俄
うあいゝとせうくみくた作んいぬる

むよん書乃おさ所時そりしてあくよてう
さうをして見る拍子てんとうく我えをよ
いろくんをつけうるむへしまよあたねぬ
たうくよて警古をまきいまおつよ乃ゆかも
きてこえぬ拍也をこなわ拍乃ゆ子あく肝要也
一太鼓乃ちちかろきたちはもきんちのすうろ
きたちよていりんの音いりまきなわく上
拍子さきくろへ志ようつてきわ乃未
あといあきも也まくはもきんちまて祢いろ
くうるへし
一うめ古
一陽の中乃陰い遊屋千妻の業也

一かけくを太鼓ようらあまわちうくをいきて
たかくつけぬ拍なわかつくくわ乃めらい
ときとうりへ
一夫乃うくひのちうまきるわろき也
拍子をひうへてきさくひきくきんよいまて
うくろ我ゆきめうくと囃まへし高曲成
ちやをまうくひれ文字くさわのへちくめを
いうけてうせうくつて音曲ゆふへしといた
みのへてうくまて作くをよまへしと祢りひ
かれうちまも序破急のいをうけて囃へし
一作り拍おくを作り拍乃業へおきまわいわぬ
百い骨をもおらしをうをうをいうまもく

いうけて打へ一ゆるのろうまて敵をさぶく
なる拍也むまよあ〜ひうる城主の器を思ひ
初一人へ入るまわあふりのなわいつゝあぶ拍の
上まもくせいかあふものせうれくせをい
みせへ〜ひ人くせみてやくくわう拍なわ
但くせを思ひ出一人へいうれたよわを拍也
くせをい似せへ〜ひ
一破の能いのふいちまうわ心ま破の心を
もちていさむうろみく嘶へし
一〜ひの拍子ものすしてうたか上きま
ゆきんつ〜まのていためぬ也心みくためん
なわみちこぶきうひをも心敵いさめまして

意人へ入作ねま拍のしろきるあるまくん
いまもくうろをさひんう肝要也ちやき
事をいうろ紙ゆうまたりなる事をい
うろをつさめちやをなわやきまと思ひて
ちやくうちへいうたかふさといふものま
なわん拍也〜拍子ともいわたりなるま
たつふぶといわ思ひたうふちやーうへい
うむ拍子まていを傷といふ拍子なわうり
さめまゆりなふけいこ敵いれ
しまを警古みと云るへいつもたり
あうんまうなわ
一〜ひのうちちやをるみ字乃位を嘶をへし

ゐるも文字はさてぬやうは難しの要也
一下の流ちやまへし是も一つの習ひのうち
かまへかの用ふまかぬしきことをうこと
うくはちやてを相應うして亟へしいたら
さぬつゝうちれむわるのせたうわちかるも
のゝねをあたうれ人事才一のひうる也
一さいのちやはうちあを策とめうけまあと
大夫も策笛さぬは作ゝうち見うこうひ笛る
しとあり笛功云なるい吹とをまへし又大夫
策とめんふみそこあひおあけぬ事あわうれ
吹い笛うわ吹とむへしも笛もゆうんして
吹とめんい流ゐわうひいうまへ

一拍狂のちやさうふたくさんはちやまへし
但拍狂はゐぬへし拍りとふわうまこ子城う
あひあそこちう拍男ひ乃狂人いあちまう
ちやまへし
一中入は大夫ちかゝわをもとぬ吹ちやもも
流もすきてうんアこふくき拍也こまを笛ゐし
いろ之大夫をかくあ座へもとすへし中入乃笛
お應乃絲とりふくへかんう
一拍ちうちはうもはくうまき拍也越城
ひかへ吹くうんをんはおへ　ソうおもくく
なうきまはきふ也大つゝれまのうちうき
やうはんうけまをうりへし愛はまあわとそ

大つゝのくさわやうをもいうけすてわを
ひとわとゝろをかきてきをゆゝしうちてい
うこねはおとはなわたいかちは鼠きさゝの
たうきも能ゝまてしちやをへしたへい鬼乃
のふゝいれとゝ無或いうつゝれまきの能乃
葉のうちなと越かちうまきさゝるきもくゝ
町ひゝうやうのたくひいうけかんようすて
は女能ゝとゝもさのこうゝらまるをいきを
為書はかけくとうりへし

一おもていはまきふわたをてけい能乃はすき
るをかむる也物てをいまんしをあすする
見きのはたき事ゝ迄こもかめさゝ すなわ

うへきくもゝさゝふきすいまんきるとゝろは
ゝわ由断お来ゝみすわゝちさゝくなる。拍なゝ
まのうちふき事ゝいゝ歯座はおりひゝはようわ
まをうちたきもの也歯座乃也をもちて志る
ゝもゝゝねゝもかめゝゝ迄たき拍也ちあゝゝ
乃をゝるものいきゝわくゝは拍也歯座乃花い
あ迄ともはぬの花ゝきゝ人いはゝいてのゝ
あゝまゝきなわゝくこうあんあつてすゝ
と考て人乃かめゝやうふゝゝあゝ肝要なわ
けいゝゝおかえてゝうゝひの文字れくさわゝ
能ゝひゝうまいおゝゝまあきともてゝちて
物ゝゝく感あゝものなわ

一乱拍子乃事一拍子を作ふうぬくやーまてん
あひくゝ乱拍子ともいへり和哥をとゝまへい
序也あけたうりいらん拍子也拍子の名をい
わくあるゝくゝたいくわ
千○千○○●○千○○千○○千○○●
○○
こゝをくわうへ一打なすわ乱拍子数乃事よ
作乃成る次第あわ花のかゝはゝ松ゝわとゝふ
ゝわしてこゝろをいゝよもくくきんよ乱拍子の
んをもつへ一同言よ次第をとゝ時よ作くゝ
うん拍子なわ大まの一めくわまゝりてはい
あふきをとりあけん時うちあをゝ也乃成る

とはかつけくわと云取ゝてかよ打あをゝ也
まくやまふ一いのわれうちいくゝおも作よく
たくさんよゝやまへ一いくゝもたうゝくく拍
すきまゝくたゝやまへ一序破急のいのわなわ
きんせいあすのうちあをゝをくゝひ出一わさの
仕舞よくこゝろ波つけへ一
右以上二百三ケ条の格意は巻よあき
たるまなわ末世よあゝひとあへうう
あひへゝれ卜安まくみ弦藝乃みこゝ
ゝわん時のせうもんのためは伝書成
うきたるされいゝるも秘密して家成
継ぎれおい見するふうまうやうの

秘密とゝハ人をよそをもて秘書
とゝ古々此ゐ人のゝ作ゝ人ゝ多ゝひ
大ゝ抄ゝ